

靖国神社問題に対する日本バプテスト連盟の信仰的立場 〔反ヤスクニ宣言〕

イエス・キリストによって啓示された、生ける三一の神は、生と死の全領域の主であり給う。わたしたちはこの神にのみ従い、教会を形成する。

今日、わたしたちは聖書の神に聴き従うよりも、この世に多く聴こうとする誘惑にさらされている。わたしたちは福音によって立とうとせず、安価な幸福主義を宣教しようとしてはいないだろうか。かつて、天皇制イデオロギーと国家神道がもつ悪霊的性格を批判しえず、「八紘一宇」の名のもとに、アジア侵略、差別と抑圧、戦争等をひきおこしていった悪魔的諸力の前に沈黙し、迎合していった教会の痛みを、わたしたちは今日どれだけ、教会の体質として克服しえているだろうか。さらにわたしたちの教会をとりまく今日の状況は、政治の宗教利用、教育の右傾化、軍備の増強等に見られるように、かつての危険な状況と酷似しているといわねばならない。それゆえにこそ、わたしたちはいま、とくに靖国神社問題を、ほかならぬ信仰の問題として取り組むことを回避できないのである。すでに十数年にわたって戦われてきたこの問題においては、わたしたちの信仰と教会のあり方が、福音そのものから問われているのである。神はキリストにおいて、わたしたちをご自分に和解させ給うた。神の義はイエス・キリストの十字架において示された。神は十字架において、救いの約束を放棄されたのではなく、むしろ完成されたのである。わたしたちは価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされた。わたしたちに求められているのは、この和解の福音を信じ、これにあずかって共に生きることである。わたしたちは十字架の福音を恥としない。その福音を、わたしたちはイエス・キリストの復活から信じるのである。

わたしたちはキリストの復活にあずかるためにキリストと共に死んだ。死はもはや、キリストから与えられた生命を脅かす力ではありえない。わたしたちにとって死の理解は、信仰にかかわる事からである。わたしたちは生命が何であるかと同様、死が何であるかを、ただキリストからのみ知ることができる。それゆえに、国家が靖国神社において戦没者の死を、統一的、体制的、絶対的に意義づけようとするに、わたしたちは反対する。死霊、怨霊、英霊への信仰に基づいて、死者を神格化し、礼拝の対象とすること、またそれによって特定の目的のために、死を美化して、死者の利用をもくろむことは許されない。それは、真の意味で彼らの死に応えるものではなく、むしろ死者を軽侮することであり、すべての遺族の平和への願いに合致するわけでもない。他方においてそれは、侵略の犠牲となったアジアの人びとの死を無視するものである。国家はいまなお戦争の犠牲に苦しむ国内や国外の人びとに対する、社会的、経済的次元で生活保障などの償いの行為をなすべきではあっても、戦争犠牲者を祀る宗教儀式をなすべきではない。国家が人びとの信仰と良心の主なることはできないからである。

靖国神社国家護持をはかる諸勢力が、日本の政治的風土において、習俗・習慣の名のもとに、政教分離の原則を侵し、国家の宗教化と天皇神格化復活への道を開こうとしていることを、わたしたちは看過することができない。それによって国内では、信教の自由への圧迫および思想の統制が起こり、国外では、他民族に対する日本の絶対化と支配が起ころうとしている。それゆえわたしたちは、「平和を造り出す」信仰を実現すべく、靖国神社問題と取り組むものである。

わたしたちは、この終りなき自由への戦いを通して、「和解の福音」がわたしたちに委ねられていることをおぼえたいと願う。アーメン。

1982年8月20日

日本バプテスト連盟
第36回年次総会